とのみ書たれば、慥なる橋は無りしと覺ゆ、

〔東山日記〕三條橋

三條橋板馬蹄轟、忽爾夢醒入洛城、十萬人家雙眼裏、自疑離婁向上明、

〔十三朝紀聞三靈元〕延寶二年四月十一日、畿内大水、流三條橋、多溺人、

〔都のにぎはひ〕四條橋新造之記

延寶二寅年四月十一日、畿内近國悉く大洪水して、三條五條兩橋共に落損しけれども、程なく元の如く板橋に造らしめ給ふ事、實に有難き上の御惠にて、夫よりして後洪水有れども、此兩橋は恙なかりし、

〔遠碧軒記一地儀〕三條橋六十間、橋柱ノヒマ毎ニ三間ヅヽ也、今度〇延寶二年兩方ニテ六間ヅヽ橋臺出來スレバ、十二間短ナル也、橋ノ幅ハ五間也、

〔百一錄〕元祿五年七月四日、雨淅瀝、至辰刻止、猶時々下、河水溶々、三條假橋流落、

〔十三朝紀聞四櫻町〕元文五年七月十六日、京師大水、破三條橋、

寛保二年八月、自二十七日至朔、畿内大雨風、京城内外大水、破三條橋、

〔山陽遺稿三傳〕高山彦九郎傳

高山正之、上野人也、字彦九郎、家世農、正之生而俊異、喜讀書、略通大義、〇中略少入平安、至三條橋東、問皇居何方、人指示之、卽坐地拜跪曰、草莽臣正之、行路聚觀怪笑、不顧也、

〔見た京物語〕三條の橋牛車を通さず、加茂川の中をわたる、

〔今日抄一〕弘化三年七月七日、京師大水、流三條、五條二橋、

〔都のにぎはひ〕四條橋新造之記

近年加茂川筋暴雨のたび毎に、土砂の流れ出る事夥しく、次第に川床高く、所々に附洲出來て、弘